

## 〔学 会〕

## 東京女子医科大学学会 第233回例会抄録

日 時 昭和55年年6月27日(金) 午後1時30分より

場 所 東京女子医科大学本部講堂

## 1. 体表の温度点、特に冷点に関する二、三の知見

(第二生理セミナー)

○小沢 隆子・金光 宗代・佐藤 栄子  
(麻酔科) 山村 佳江

thermoaesthesiometer を用いて、体表の異なつた部位の単位面積あたりの温度点の数を測定し、測定値の再現性、冷点と温点の数の差、体表の部位による冷点の数の相違を検討した。

20歳の女子3名について、一定温度に空調された部屋で測定し、右手背部の冷点と温点の数を同一日時に2回連続測定した。2回の測定値の算術平均値に対するそれぞれの測定値の偏差は、10%以内であつた。

3名とも、温点の数より冷点の数が多かつたが、測定と冷点の数の比は異つていた。

被験者のひとりの、上肢および前腕内側の一定部位の冷点の数について、異つた日の同一時間帯に、2回あるいは数回の繰り返し測定の結果得られた値は、いずれの場合も10%以内の偏差であつた。

同じ被験者の体表の広範囲にわたつて冷点の数を調べた結果、上肢では、内側に比較して外側にやや多く、体幹では、背側に比較して腹側に多い傾向がみられた。下肢では、やや複雑な結果を示し、上腿部は外側に比較して腹側ないし内側に、下腿部は外側に冷点の数が多い傾向がみられた。

同一の測定日に、冷点の帯状分布を調べた結果からは、腹側、背側あるいは内、外側による相違が、より明らかにみられた。このことは、臨床上、冷覚鈍麻帯を調べる際に留意すべきことを示している。

## 2. 最近の菌血症についての二、三の考察

(臨床中央検査科) ○熊田 徹平・清水喜八郎

近年の菌血症について、宿主側の要因を中心に考察を行なつた。

1) 本学の本院、心・消・脳各センター、第二病院の菌血症例について年齢との関係について解析した。その結果、60歳以上の高年齢層が全体の35.7%を占めていた。グラム陰性桿菌についての検討してみると、60歳以上の層が40.9%であり、29歳以上での21.5%に比べ高年齢層に多い傾向が強かつた。とくにセラチア感染症においてその傾向が強く、60歳以上の層が全体の53.7%をしめていた。これらのことは高年齢層において感染に対する抵抗性が減弱していることを示唆している。

2) 近年はグラム陰性桿菌血症の増加が注目されているが、グラム陽性菌による菌血症も少なくない。とくにグラム陽性球菌のうち最近では *Staphylococcus epidermidis* の増加が報告され、またグラム陽性有芽胞菌の *Bacillus cereus* の菌血症例も報告されてきている。最近経験したそれら症例について臨床細菌学的検討成績および治療上の問題点について報告した。とくに前者については Coagulase 陰性 DNase 陽性菌について若干の検討成績をのべ、後者の問題については抗菌剤感受性の問題に言及した。

質問

竹内富美子(内科I)

約10年間ににおける菌血症の検出数が最初のスライドに出ていましたが、1978年、1979年、特に1979年の検出数が多く出ていましたが、この約10年間の菌検出に関する培地などについては、同じものを使用したのでしょうか、または何か違つたものを使用したのでしょうか。

答

熊田 徹平(臨床中央検査科)

菌の検出に関しては特に変わつた点はありません。検体提出頻度との関係などは今回はみておりません。

## 3. 前立腺酸性ホスファターゼ(PAP)の Radioimmunoassay

(ラジオアッセイ科)

○野村 武則・地曳 和子・小田桐恵美・